



社交性論と近代文化における友情： 歓談における 「空の空間」の可能性（小特集Ⅰ 「社会学的言い 訳」 批判と現代社会学の課題）

田村， 豪

(Citation)

綜合文化, 2:171-189

(Issue Date)

2026-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100504204>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100504204>



社交性論と近代文化における友情

—— 歓談における「空の空間」の可能性 ——

田 村 豪

(TAMURA Tsuyoshi)

自由な社交性の交流からは各人の友情が発展してくるはずである。

そして各人の友情は再度社会的結合の基礎となる。

Friedrich D. E. Schleiermacher *Ethik* (1812/1813) (130)

序 対話の要請と空虚さ

梅村 (2023) において指摘されているように「社会学的言い訳」批判は「自己責任論」とも結びついている。特に日本においては 2010 年代以降いわゆる「自己啓発本」というジャンルにおいて、社会的なものを排除し個人の心構えと還元する傾向が強まっているとされる。こうしたジャンルのベストセラーを分析から明らかになるのは、その人の置かれた社会的状況や他人はその自身がその人の力で変えられるものではない、という点だ。社会的状況に対してはそれを無批判に受け入れることで心理的葛藤を回避し、他者にたいしては距離をとることで自分自身が制御可能な範囲を限定することが推奨されているという (牧野 2023)。身近な他者を含めた社会的なものへの無力感が受け入れられると同時に、個々人には現状を受け入れそのなかで自分のことは自分で対処せよと推奨されるわけだ。

こうした状況にたいして、「安心・安全」をもたらすはずであった、親密圏や親密な関係性でさえ決して素朴に受け入れられる状況にはない。

ハーバーマスやセネットは、1960 年代から 70 年代にかけて、「豊かな社会」の実現とともに人びとが公共的な領域から親密圏へと撤退していく様を批判していた。しかしそこにはある前提があった。それは安心と安定の感覚を与えてくれる私生活圏が公共圏とは区別されるかたちで存在し、プライベートにおいては安心や安定が確保されるであろうという前提である。しかし現代においてはもはや「撤退」を許容してくれるはずの私生活圏を確保できなくなっている。私たちが出発点としなければならないのは、「親密圏における基本的な『安心』や『安定』の感覚が毀損されているという現実である」(鈴木 2009: 197)。鈴木宗徳はこうした現実において私たちが直面しているのは「『次

はもう選べないかもしれない』という恐怖」だと指摘する。2000年代後半に相次いで指摘された若者たちの友人関係における過剰な気遣いや同調圧力、1990年代以降の雇用形態・組織形態の柔軟化といった現象が取り上げられる。そこで生じているのは「人格崇拝の高度化」であった。それは相手を傷つけることを極端にまで回避しあう状態である。お互いの「聖なる自己」が傷つけないように細心の注意を払いながらコミュニケーションが続けられる（森 2000: 103 f.）。そこでは互いのプライバシーには深く立ち入ることなく、コミュニケーションがシームレスに続くかどうかをチェックし合うことを余儀なくされている。

さらにこうしたコミュニケーションの表層性はたんなる人間関係の希薄化でもない。繊細で高度なコミュニケーション・スキルのうえでそれらが行われているという点では「濃密」ともされている（鈴木 2009: 197-198）。その帰結として、コミュニケーションが孤立感や孤独感につながることも指摘されている（石田 2022: 49-60）。やり取りの内容よりもやり取りそのものを重視するのであれば、そうしたやり取りは「空虚さ」として実感される。

現代社会においては、コミュニケーションであることそれ自体を否定することはほとんど不可能に近い。そして同時にコミュニケーションへの着目は公的な領域に限られない。親密な関係性においてもあるやり取りの連続が「空虚さ」に帰結しているといえよう。

1 距離をもったやり取りをめぐる問題

1.1 他者との親密性をともなう適切な距離が語られない学説史上の背景

そこで本稿では、コミュニケーションから生まれる親密性をともなう人間関係、そしてそれが空虚さに陥ることのない理路を探求する。その検討に際して取り上げるのは、G・ジンメル¹の社交性〔Geselligkeit〕、気配り〔Diskretion〕¹、友情・友人関係〔Freundschaft〕であり、そこで問題になる境界〔Grenze〕である。以下では「気配りの心理学」（1906）を取り上げ、近代社会における知人関係を出発点としながら、それを基礎とした夫婦関係と友人関係およびそこでの「新しい共同性」の指摘があることを示す。社交性論は、その行論や論述内容からして、その知人関係の先にあり得る人間関係として友人関係と重なりあう。

近年、哲学・哲学史のなかで会話や社交性にかんする研究成果がしばしば発表されている（cf. 水谷 2022; 高木 2023）。もちろんそれらは、それぞれの研究分野における研究史の蓄積上にある。しかし社会学的に考えるなら、曖昧な表現なことを承知の上でこれらの研究の背景に「何か」があると考え

1

ここで扱う「Diskretion」は「本来簡潔な日本語には訳出しようがない言葉である」が、その意味は、「他者の覆われ隠された領域、つまりいわゆる内面というものに不当に関与しすぎない深い配慮ないし思慮」である（藤 1995: 196）。日本におけるジンメル研究上でもこの語の翻訳は定まっていはいない。「遠慮」（清水 1979: 74）、「秘密保持」（藤 1995）、「慎み」（北川 1997）、「配慮」（菅野 2003）、「思慮」（居安 2004: 67）、「分別」（岡澤 [2004] 2015）と訳されている。その語源はギリシア語の *khrîno*（「分ける、ジャッジする」）だ。ここではジンメルが *Diskretion* を物質の私的所有と対比させて「心・魂の私的所有」との関連で考えている点からして、仮説的に「気配り」と訳しておきたい。「気配り」とは、自己の「気」を他者の「気」（ないしはその場の雰囲気「気」）へと意識的に差し向けるものだ。またもう一つの訳語の問題として、友情／友人関係である独語の「Freundschaft」は「-schaft」という接尾辞からして「関係」を意味するものではあるが、「feine innige Freundschaft」[内的友情] や「etwas aus Freundschaft tun」[友情から何かを行う]といった表現があるように日本語でいう友情の意味でも用いられる。これは英語でも同様であり、friendship は日本語で友情でもあり友人関係でもある。英語の日本語訳としても、感情的側面が強調される場合には「友情」、関係の側面に焦点が当たる場合には「友人関係」と訳されてきた（cf. 久保田 2024: 46）。本研究でもこれにならう。

高木裕貴は「よき飲み会の思想——人づきあいの変遷を読み解く」という菊部直との対談のなかで「現在の日本は、へべれけ文化的な交流からカント的な社交への移行期」としている。ここで「へべれけ文化的」とされるのは菊部の対談冒頭での「酒を飲み、おたがいに醜態を見せあうことで、感情の一体感を得る」ようなものである。高木はそうした「醜態」と表現されるような状況を演出することによる共同性を完全に否定するのではなく、「飲む場での交流」は生きているとして、その展開可能性を「温泉、映画館、コンサート会場」といった空間にみている（高木・菊部 2023: 84-91）。

てしまう²。『疲労社会』（原著 2015 年）などで現代社会を鋭く分析するビョン Chol・ハンは、『透明社会』（原著 2012 年）のなかで現代社会の規定の一つを「親密社会」だとする。親密社会とは、「儀式化された身振りや儀礼的に形式化されたふるまいを信用しない」社会である。そこでは「親密な感情や情動を開示し、心・魂〔Seele〕を剥き出しにすることで、心・魂の透明性を達成できると考えられている」（Han 2012: 28 = 2022: 72）。

ハンの指摘は、社会学における相互行為論と比較すると、的外れだと一蹴されてしまうかもしれない。いわゆる「人格崇拜」を前提とした近代社会のなかで他者に深入りしないことをめぐる社会学においては相互行為論の蓄積があるからだ。しかしハンの指摘と社会学における相互行為論は、他者と適切な距離のなかで親密性をもって付き合う術がまだ十分に論じつくされていない、という点で重なる。

現代の社会学の相互行為論を突き詰めていくと、「見知らぬ人とつきあう術の欠如」に行きつく。見知らぬ人との相互の信頼を支えながら親密性を回避する手段こそが、「儀礼的・市民的無関心」である。私たちは共在のなかにいると自然と生じてしまう親密性を回避することで、見知らぬ人との接触に労力を費やさないようにしている。儀礼的無関心というかたちでしか見知らぬ人に対応できないという意味で「見知らぬ人とつきあう術を著しく欠いている」のだ（芦川 2020: 9-10）。

たしかに私たちは見知らぬ人と容易に関係をもとうとはしない。電車のなかで隣の席の人に突然話しかけることも、レストランで別の席の人に声はかけない。けれども私たちはスーパーマーケットのレジの人に挨拶をすることも、バスの運転手にお礼を述べることもある。つまり見知らぬ人に対してその人と積極的に近づこうともしている。そしてそうした挨拶の言葉のやり取りを基本的には不快なものとは考えないであろう。むしろ見知らぬ人との接近を示す振る舞いは、その人を知らないことによってその積極的意味が際立つことになる。ではなぜ社会学の相互行為理論では秩序形成の作法があるとされ、ハンのような現代社会の人間関係の診断になると儀礼的な秩序への不信があるといわれるのか。

社会学における相互作用・相互行為論の系譜を辿ってみよう。この論題の代表者の系譜をひとまずジンメルからゴフマンへというラインに設定しよう。この系譜を辿るとジンメルの社交性論が本稿の問題を検討するために重要なものだと明らかになる。ゴフマンは、ジンメルの議論に基づいて自身の相互行為論を彫琢している。ゴフマンは『日常生活における自己呈示』の序文において、ジンメルの研究の方法と自らの方法とを明確に重ねる（Goffman 1959 = 2023: iv）。しかし、ゴフマンが集団の規模や成員の性質ではなく「集まりそのもの」に焦点を当てる際には、社交性を「まじめな生活の込み入っ

た状態ときっぱり切り離された『単なる』一種の遊びとして扱おうとする迷惑なジンメルの努力」としてジンメルの社交性論を批判的に継承し、「ゲーム」に注目しながらより一般的な相互行為秩序の解明に向かう（Goffman 1961 = 1981: 8-9）。

ゴフマンによる継承はジンメルの相互作用論のコミュニケーション論的展開の一つの道であった。ジンメルの相互作用論は、二つの領域にまたがっている。一つは相互作用論が広い社会圏を対象とする場合には、相互作用は知識、法、貨幣といった一般的な結合媒体によって成立する。二つは「汝」にかかわるより対人的な相互作用においては、それらの結合媒体よりも断片的な情報と誤解、曲解、推測にもとづく構成的な他者把握が行われる。どちらの相互作用においても、非知と伝達の契機が重要になる。一般的な結合媒体の場合、それが何を伝え何を伝えないかは既に決められているが、対人的な相互作用の場合、これらはフレキシブルである。前者の相互作用論は社会学のなかでは、ゴフマンやエスノメソドロジー、ルーマンにおけるコミュニケーション論として受け継がれた。これにたいして「汝」とかかわる深い他者把握は、哲学的なコミュニケーション論としてブーバー、ハーバーマスへと潜在的に受け継がれていく（廳 2017: 303）。

この二つの道への分化、分裂の結果として、ハンの「親密社会」という規定と相互行為論における儀礼的無関心以上の「見知らぬ人につきあう術の欠如」が生じているのではないか。つまり、見知らぬ人びとを一般的なメディアをもって媒介する議論の蓄積はあるがそれが十全に機能しない人間関係の領域、「汝」にかかわるような領域が前者の議論によって際立たせられながらも、後者の領域へとうまくアプローチできていないのではないか。ということはこの二つの領域を、未分化なかたちではあるかもしれないが含んでいるジンメルの相互作用論をもって接続することはできないだろうか。

この両者の議論の原点が見逃された結果、芦川が指摘しているように、公共性において親密性が常に回避され続けるだけで、公共と親密が対立関係で捉えざるを得なくなっている状況が生じている、ないし社会学理論が、その間における術をもたないとしか表現できなくなっているともいえるのではないだろうか。ハンが指摘しているのは、この事態の裏返しとはいえまいか。少なくともハンの指摘と芦川の言明は決して相いれないものではない。〈親密性をなんらかの形で含みながら適切な距離のなかで他者と付き合う術〉がまだ発見されていない、ないしは社会学理論では扱えていないということではないだろうか。

そこで本稿では、ジンメルの相互作用論のなかでもっとも「純粹」とされる社交性論をきっかけに、この術を考える枠組みを提示することで、二つの領域を跨ぐ曖昧な関係として「友人関係」を示す。以下では先述の系譜に

注目して、ジンメルの社交性論からゴフマンが切り離したものに焦点を当てることから始める。

ゴフマンの相互行為論は、ジンメルの「社交性」の議論を批判的に継承することで「集まり」を中心とする世界を描くのに成功している。しかし、ゴフマンは「知っている人」との振舞いについては論じるが、知人関係以上の人間関係へはほとんど立ち入っていない（Goffman 1963 = 1980: 121 ff.）。これはゴフマン自身がジンメルの社交性論を引き継いだ際の姿勢によるものだ。ゴフマンの議論では、相互行為をかなりの程度一般的に描くには適しているようが、社交性に特有の性質を描くことは難しい（田村 2020: 170）。社交的集まりに特有の性質を議論するにあたり、仮説的に考えられるのは、社交性に特有の人間関係がありうるのか否かであろう。その場にいる人びとの性質や関係性を問わず、状況に定位した議論がゴフマンの相互行為論の主眼であったとすれば、まず問うべきはこの留保された側面、固有の人間関係を形成するような性質がジンメルの社交性論にはあるのか否かだ。

1.2 社交的な人間関係と「適切な距離感覚」

社交的な人間関係の成立の可否を問う必要はあるにせよ、社交性論から生じる人間関係については見解の蓄積がある。社交的な人間関係はジンメル自身が望んだものであり、現代社会を射程にいれ人間関係について再考を促すとされる。それらに共通しているのは、親密性という接近の契機と距離を保つないしは離れるという離反との契機の同時性である。ジンメルは「他者の内面に介入せずそっとしておいてくれる、あるいは他者の存在を距離をもって容認してくれる」態度を求めており、「親密性の変形としての社交性」を論じた（廳 2015: 45-46; 廳 2008: 17）。そしてこの親密性のあり様は、決して「社交界という場所にのみ限定され」たものではなく、「モダン以降の親密な人間関係の本質にかかわる」（菅野 2003: 228-230）。さらにジンメルの社交性論には「礼節 [Takt]」を中心として「距離のある関係性によってのみ可能になる、役割を超えた人格の承認」があり、それが近代の疎外関係を遊戯的に克服する様を示唆する（Albrecht 2018: 249-250）。そして社交的交流の自由という側面に注目して、社交的交流が空間的なかたちをとったものとして大都市があるともされる（小川 1996: 59）。

ジンメルの社交性論の可能性を、彼による時代診断でもある『貨幣の哲学』も踏まえて、もっともリアリティをもって描き出したのは菅野仁の『ジンメル・つながりの哲学』である。菅野は貨幣が生み出す距離感覚を重視する。貨幣は、個々の人格に基づく直接的な人間関係を解体して、人間のあいだに距離を作り出す。一般的に、私たちは貨幣を使って品物を買うとき、それを誰がどのような感情とともに売っているのかを気にすることはない。だから

こそ貨幣をもっていれば世界のあらゆる人との商品交換が可能になるのだ。貨幣が人格的なものを留保することによって、私たちは個々人の内面を確保できるようになる (GSG 6: 653 = 529; 菅野 2003: 211-213)³。

菅野が論じるジンメルの社交性論は、適度な距離感覚を人間関係の基盤としている。菅野は社交性を「関係そのものを楽しむ関係」として、その本質を「他者への繊細な配慮性 [Diskretion] とそれに基づいて関係そのものを味わおうとする態度」にみる。そこで社交的な関係と「知人関係」は「きわめて近い」とされている (同: 228-230* 括弧内の原語は筆者追記、註1を参照)。

しかし、これで近代社会における社交的な関係の可能性が論じつくされたわけではない。たしかに菅野は、絶対的な手段であるはずの貨幣が絶対的な目的へと転化し、あらゆるものを交換価値、貨幣の価値でしか見られなくなってしまう近代の病理を見逃してはいない (同: 203-210)。しかし、現代社会に支配的な貨幣が生み出す距離感覚を通して、人びとが適切な距離感覚を養うことができるのなら、ハンの指摘は意味をなさないだろうし、冒頭で示したように社交性について研究がなされることもないのではないか。たしかに菅野は、距離感覚を、近代社会における分業を可能にしている潜在力というかたちで捉えている。つまり社交的關係が潜在的に可能という議論になっているのではある (菅野 1990)。それでも、菅野自身が『友だち幻想』のなかで、適切な距離感覚による人間関係が決して容易ではないことを学校と社会との環境の違いのなかで認めている (菅野 2008: 122-126)。これは、いくら貨幣経済が支配的な現代社会に生きていようと、適切な距離感覚は容易に身につくものでも、容易に意識化して使用できる能力でもないことの証左なのではないだろうか。

すなわち、貨幣的な距離感覚と社交的なそれとの間にはもう少し複雑で特殊な事情があるのではないか。ここでの手がかりは、距離感覚を論じる上で重視される「知人関係 [Bekanntschaft]」と「気配り」、「礼節」である。後述するように、社交性論のなかで、「社交性に第一に要請される」ものが「気配り」であり、「礼節」もきわめて重要なモメントとされる (GSG 12: 182, 180; GSG 21: 755)。

以上を踏まえ、本章の問いを定式化したい。第一に、状況に定位している社交的な集まりや歓談についての議論は、状況に還元されない社交性に特有の人間関係を考えるものなのだろうか。第二に、社交的な関係が特有の人間関係を生み出さるのであれば、それは知人関係という関係の類型や、そこで要請される「気配り」や「礼節」を手掛かりとするとどのようなものとして描き出せるのか。論述は次のように進める。まず、第一の問題に応えるため、社交性論におけるある種の実体性をもった形象の議論を整理する。次にジンメルが社交性における第一の条件とした「気配り」を論じた「気配り

3

GSGはGeorg Simmel Gesamtausgabe (『ゲオルク・ジンメル全集』)を示している。全集からの引用の際には、GSGと略記し該当する巻の数を添え、参照箇所を記す。また同箇所の邦訳がある場合には、「=」記号でつなぎ邦訳のページ数を付す。たとえば(GSG 6: 136=107)とある場合、これは『全集』第6巻に収録されている『貨幣の哲学』の136頁、邦訳の107頁を示している。

菅野が貨幣論から社交性論へ、そして友人関係へのシームレスな議論の展開をさせているのは、菅野が恋愛関係を論じるに際してその人であること「汝」性を主要な問題とはしていないことと無関係ではないように思われる（菅野 2009）。菅野はもちろん「ロマンティック・ラブ」という考え方の一切が近代的なものだとは考えてはおらず、一切を社会学的に捉えることには批判的である。しかしジンメルがこだわっていたと思われる「我－汝」、以下で出てくる「異なる魂」、個性的他者の問題に迫り得るところまで議論を進めながら、その先を論じてはいないように思われる。

の心理学」を検討し、「気配り」をもとにして、人格性に基づいた友人関係がもつ「新たなる共同性」の可能性をみる。ここから社交性論が示唆する人間関係として「友人関係」を指摘し、親密性にかかわる議論として社交性論を捉えなおす⁴。すると「気配り」と「気配りのなさ」との葛藤が生まれる「他者理解」が入り込みはするのだが、ジンメルの空間や境界をめぐる議論を参照すると「新たなる共同性」の理論的裏付けを考察できるのだ。

2 影の形象と部分的人格性

2.1 個々人が結びついている影の形象

社交性論の二つの特徴を指摘する。第一に社交性は状況に還元されない自律した「形象」をもつ。第二にこれは遊戯や芸術との類比で現実にとつての影や象徴として捉えられる。

ジンメルが社会学の創始者のひとりとして描かれる場合、彼の議論の特徴は「相互作用」であって、まさに社会の動態そのものを捉えようとした（GSG 16: 69 = 12）。ジンメルは初期から、動態的な「社会」を論じるために「社交的集まり」に言及している（田村 2022）。

しかしジンメルは社会の動態の相をみているだけではない。ジンメルの形式社会学は、諸個人の相互作用に還元するだけではなく、社会の実在性、つまり個人と社会との対向関係もまた論じている。そうした個人に還元できない社会の実体性は、当事者みずからが社会を「超個人的統一体」とみなすことから生まれる（杉本 2024: 154）。

もちろん同様のことは、社交性論が『社会学の根本問題』において「純粹・形式社会学の例」として描かれていることから推察できる。ただし後述する「社交性に特有の関係」を議論するためにも、社交性の実体性がどのようなものを明らかにしておこう。ジンメルは社交性の実体性を、「身体 [Körper]」、「世界 [Welt]」、「王国 [Reich]」といった言葉で形容している（GSG 12: 179, 183, 191）。その一つが「形象 [Gebilde]」である（同: 177）。それらはすべて社交性という形式が、実体性をもって個々人の利害関心から自律したものとして成立していることを示している。社交性は「社交の身体 [Körper] をうちたてる」とされ、実体性をもつのだ。ただしこの「形象」は個々人に感じ取られるものを意味しており、社交性それ自体も感情に結びついた「形象」である。社交性という形象に結びつく感情が「社交性衝動」だ。「あらゆる社会形成の実際のきっかけには、社会形成そのものに価値があるという感情が結びついている」（同: 178 強調引用者）。

社交性という形象のもう一つの特徴は、それが芸術・遊戯との類比で語ら

れるところにある。社交性は「社会的な芸術形象」であり、「社会化の遊戯・演技形式」[*Spielform der Vergesellschaftung*]なのだ（同：180-181 強調原著）。つまり社交性は、芸術作品と同じく現実に対して独自の地位をもつ。芸術作品が現実ぬきに現実を示すように、社交性もまた現実からの距離のなかで現実を示す。

ここでの社会における現実とは個人と社会との対立の「悲劇」のことだ。社会は個人を手段としてのみ、個人は社会を手段としてのみ扱う。互いの「諸要求の重なり」の複雑さが把握できずに対立するのだ。こうした現実にたいして社交性は悲劇を「影の王国の象徴遊戯へと書き換える[übertragen]」。社交性は、個々人の多面性、社会の多面性とが重なる動態のイメージ——集まっては解かれる「結合の自由」と表現される（同：189）——をもたらす。

といっても、社交性の象徴は、芸術作品が現実とは全く別の次元にありながら決して嘘ではないのと同じく、嘘ではない。社交性が生や生動性、人格性と結びついているからだ。「あらゆる社交性は、生の象徴[Symbol]にすぎない。それが軽やかな喜ばしさをもたらす遊戯の流れのなかに描かれているように。しかしそれでも生の象徴である」（同：191 強調原著）。同じことは社交的歓談についても述べられる。

客体的なもの[社交的歓談で発言されたもの]は、あらゆる人が一様に分かち合うことができる内容があらかじめ与えられたものではなく、個々の人が全体性へと贈るものであり、ただし与える人がその贈り物の背後へといわば不可視になる、そういう贈り物[Gabe]である。（同：189）

発言はあくまでその特定の歓談と結びついており、個々人がもたらすものだ。それでもある発言を誰が発したのかは決定的問題ではなく、発言は歓談へと贈られる。社交性という形象は、独自の形象として成立し、さらには現実にとっての影の位置にあるために個人と社会という悲劇的な対立を回避する。しかしこの形象は決して嘘として一蹴されるものではなく、個々人の生に根づいている。社交的形象は生きた影・象徴なのである。

では影でも象徴でもある形象のなかに人格的なものはどのように入れ込まれるのか。現実的な目的をもたずに、個々人が与えながらも与え手が見えないとはどういうことなのか。こうした問題を扱うのが、「気配り」や「心遣い・礼節感情」の議論である。

2.2 部分的な人格性の参与としての気配り・心遣い／事例としてのコケットリーと歓談

個々人は、社交性の外にある客観的な目的をもたない「社交的人間」として社交性へと参与する。強調されるのは、社交的人間は部分的な人格性をもって社交的集まりへと入り込む点である。全体としての人間は「まだ形式を与えられていない、内容や力や可能性の複合体 [Komplex]」であり、個々の「動機や関係づけ」に応じて、全体が「それぞれに分化して境界に規定された形象 [differenzierten, grenzbestimmten Gebilde]」となる。社会生活上のさまざまな場面に応じた人間がいる。社交的人間もまたその例に漏れず、全体としての人間の一部である。ただし、社交的人間は、彼の人格性そのものと適切なかたちで結びつかなければならない。一方で社交的人間はその人の「純粋な人間性の能力、魅力、関心」をもって社交的な集まりへと入り込む。他方で、社交的集まりでは、「きわめて主観的なものや人格性の純粋な内面性の前で立ち止ま」るべきなのだ (GSG 12: 182)。

内面性の発露や侵入の前にとどまるために求められるのが「社交性に第一に要請される気配り」であり、「礼節」や「心遣い・礼節感情」である。「思慮と様式化 [Reserve und Stilisierung]」のなかでのみ、社交的人間は成立するのだ」(同: 182)。社交的な集まりに入り込むものは、社交的ではない集まり以上に「人格の尖鋭さと身勝手さをもう一段階引き下げる」ように調節されなければならない。つまり日々の関心や目的といった内容と結びついたやり取りでは、その内容にふさわしい社会化の形式があるために、たとえ多少の身勝手さがあってもやり取りは成り立つし、内容がなければやり取りが成立しない。しかし、社交的集まりは集まりそのものを目的とするために、その他のやり取りよりも形式にたいしてずっと慎重にならざるを得ないのだ。ここで「心遣い・礼節感情 [Taktgefühl] がきわめて重要な意味をもつ」(同: 180 強調原著)。この感情の性格は次のようなものだ。

心遣い・礼節感情によって、他者への人格的な関係のなかで個人の自己統御がもたらされる。……そしてひょっとすると、個人的な衝動性、自我の強調、精神的かつ外的な要求にたいして、他者の権利が要請する境界を引くことは、礼節 [Takt] のもっとも特別な作用かもしれない。(同)

この箇所は、目立たないが社交性論の一つの要点だ。というのも社交性と礼節が不可分のものとして語られているからである。「礼節 [Takt] は、社交性においてもっとも不可欠なもの」であり、「自己が他者の権利の前で立ち止まるべき、感じられる境界 [gefühlte Grenze]」なのだ (GSG 21: 755 強

調原著)。

ジンメルは、「気配り」や「心遣い・礼節の感情」を社交的な集まりにきわめて重要なものとしたうえで、これらを消極的な規定にとどめる。それにくわえて積極的なモチーフがある。このモチーフは互いが互いを目的として「社交的価値（喜び、気楽さ、活発さ）」を内発的に相互にもたらすもので、与え合うという点をジンメルは「積極的」とする。ただし価値を与える個人は隠され、わずかに垣間見える程度でなければならない。価値を与えあいながら個人が表に出てこない集まりが達成されるのは、互いに「全員を特別敬うかのよう」に演じる場合だ。社交性は「遊び演じられた民主主義」である(GSG 12: 183)。

その事例として扱われるのはコケットリーと歓談[Unterhaltung]である。両者ともに個人が前面に出ることはないが、個人とは切り離されてはいない。コケットリーにおいて主体と切り離せないエロティックなもの、最終的なものが「暗示と仄めかしの魅力」となるとき、そのやり取りは「高度な社交的文化[Höhen der geselligen Kultur]」となる(GSG 12: 186-187)。他方で歓談は、先にもみたように、社交的歓談における個人は話題や会話を提供しながらも、その身が「贈り物」の背後に隠れてみえない。ただし注意しておくべきは、歓談は性愛のように先鋭化する要素がないので、より平等でより社交的であるという点だ。この点は後述する知人関係を出発点とする関係での友人関係と夫婦関係の議論を理解するうえで問題となる。

さて社交的人間が部分的な人格性をもって社交性へと入るときに要請されるのが、気配りや心遣い、礼節であった。ただしそうした感情は社交性の外側からくる、あらかじめ確定されている規則ではない。社交的集まりにいる個々人それぞれの内発的な社交性衝動から生まれる。そして社交的な価値が、与え手が直接には見えないかたちで贈りあわれる。

ここまで社交性論がどのような性質の形象を作り上げ、そこへ個人がどのようにかわってくるのかを見てきた。社交性は、個人と社会との悲劇が生じる社会的現実において、自律した独自の形象でありながら、個々人が捨象されることがない影・象徴の関係にあった。そして個々人が部分的な人格性をもって自らの内発的感情に基づきつつ、他のやり取りよりも慎重に、個人が後景に退きながら相互の喜びを追求するというものだった。

社交性をもつ独特の形象のなかに、菅野が指摘したような『貨幣の哲学』で論じられる近代における個人同士の距離を読み込むことができる。問題はその先である。いかにして貨幣的な距離と社交的な距離は区別されるか。菅野が社交的な人間関係に「きわめて近い」とした知人関係と「気配り」の問題から検討する。

3 知人関係をもとにした親密な友人関係と社交的関係の重なり

本節では「気配り」についての独立した論稿である「気配りの心理学」を取り上げ、そこで展開される人間関係の議論から社交性論へと接近する。結論から述べるなら、たしかにジンメルの社交性論は知人関係に基づく。しかし部分的な人格に基づいた親密性をもった人間関係も決して排除されない。

3.1 知人関係における気配りと気配りのなさ

ジンメルは、近代文化の決定的な性格の一つに「知性」を据えていた (cf. GSG 6: 602 ff. = 488 ff.). 知性的性格に適う、相手についての知と無知が織りなす「表層的な」人間関係が「知人関係 [Bekanntschaft]」である。ジンメルは「知人関係」を、「モデルネの文化が浮かび上がらせた特別な概念」であって、「根本的には親密な関係」ではないとする (GSG 8: 108)。それはある人について、「純粋に社会的・体面的意味」ないしは「他者がわれわれに示すものだけを知っているという意味」で知っているという程度の関係である (GSG 11: 395 = 訳上 361)。ジンメルは、近代社会に特有の知人関係を第一に据えてから、友人関係・友情 [Freundschaft] や夫婦関係 [Ehe] を検討する。

この知人関係に欠かせないものこそ「気配り」である。「知人関係は<気配り>の本来的な在処なのだ」。というのも、「気配り」は、相手が明らかに隠そうとしていることを尊重するのみならず、「他者が積極的には明らかにしないものも含めて、あらゆる知から意識的に距離を取ること」だからだ (GSG 8: 109 強調引用者)。

ただし「気配り」は外部から強制されるものではなく、他者の理念的領域を尊重する内発的な強制力をもった感情であり、これが「権利感情 [Rechtgefühl]」だとされる。他者との距離の要請は、ある感覚を示している。それは「あらゆる人間の周囲にはもっとも多様な広さと方向をもった理念的な領域」があるという感覚である。この領域の侵害によって名誉感情が傷つけられたり、そこに入り込む人は「厚かましい」とされたりする。「気配り」とは、その境界を見定めて他者の理念的領域を遵守する「権利感情」なのだ (同)。

それでも「気配り」は、たんに距離を取ることではない。それは人間交流における真逆の作用、つまり「気配りのなさ [Indiskretion]」にも大きく依拠している。「気配りのなさ」は、たんなる他者の理念的領域の侵害ではなく、「より繊細で曖昧で」、「ある程度の正当性をもつ」のだ。ある人は、他者について他者が語っていること、示していること以上のことを知ってしまう。「敏感な心の耳をもつ者には、人間は幾度ともなく自己のもっとも秘められた

思考や性質を漏らす」のだ。ちょっとした身振り、挙措から何かを察知してしまう。察知したことは、相手に知られてしまうと何となく居心地の悪いものだ。察知は「意図した熟慮なく自動的に起き」てしまうので、その意味で避けようがない（同：110）。だからこそ意識的な気配りが重視されるのであり、「気配り」と「気配りのなさ」とは不可分だ。

3.2 近代における親密な関係の可能性

たしかに「気配りの義務は原理的に存在している」のだが、その義務は人間関係の全体を覆わない。「＜常識＞[gesunder Menschenverstand]」は、気配りの義務や権利とは関係ない。すなわち「その理念からして人格性の広がり全体を無条件に把握する関係」があり得る。それが友人関係と夫婦関係だ（同：111 強調引用者）。

近代における親密な人間関係としてより可能性があるとされるのが、友人関係である。というのも夫婦関係は「愛」に基づくからだ。夫婦関係は、「官能性によって」人間関係を形成する要素の「一面的な尖鋭化」が容易に生じる。そのため愛以外の、「実践的、道徳的、精神的」要素によるつながりを阻害してしまう。しかし友人関係にはこうした尖鋭化がない。友人関係は「人間全体と人間全体とを結びつけうる」のだ（同）。

もちろんジンメルは、こうした関係が容易に達成されるとは考えていない。近代の人びとの人格は「あまりにも独特に個性化して」おり、「あまりに多くのものを隠さなければならない」。そのため近代の友人関係は、古典古代から望まれた「絶対的な魂からの親密さ」とは異なり「分化した友情」に基づく。友情といえども関係のなかにあらわれるのは部分的な人格性にとどまる。そこで「気配り」への要請が必須となる。気配りがなくなり「両者の接触ができれば、互いの良き仲を保つ限界[Grenze]を苦痛と感じてしまいかねない」。そのために「友情の内部への侵入[Eindringen]や配慮[Reserve]の程度がずっと大きな意義をもつ」（同：112）。つまり相手の領域への気配りは親密な関係をただ阻害するものではなく、あるかたちにおいては親密な関係を助けるのだ。

こうした「相手の感情領域や関心領域に立ち入らない」顧慮[Rücksicht]は、その間柄を戸惑わせるのではなく、むしろよい場合には新しいかたちの柔和[Zartheit]、まさに新しいかたちの共同性[neue Gemeinsamkeit]なのだ。というのも傷つきやすく荒涼とした領域の相互的な回避はいたるところで、水面下の近さ[unterirdische Nähe]として、そして結びつける力として多くの積極的な契機に匹敵する、言葉を紹介しないで良き人間関係を保つこと[wordtloses Sichverstehen]と

して作用するからだ。(同：112-113)

お互いの領域への注意深さは、必ずしも重荷になるわけではなく、「新しいかたちの繊細さ」、「新しいかたちの共同性」を産むとされる。お互いがお互いの領域へと入り込まないことが、逆に関係形成の積極的な力である「水面下の近さ」、潜在的近さをもたらすのだ。この近さが「言葉を介さない良き人間関係の保持」だ。この点に近代社会における気配りの意義を読み取ることができる。つまり、あることについて発言・発信しないことは、近代以前には人間関係を結びつけるうえで決して積極的な意義をもっていなかった。しかし、近代社会においては、積極的に相手の領域を回避すること、それについて言葉を発しないでいることが人間関係に積極的な意義をもつとされるのだ。

3.3 知人関係から生まれる親密性へと開かれた社交性

以上から、「気配りの心理学」における知人関係が「気配り」を銚に、友人関係や夫婦関係といった親密な関係性へと展開されうるのは明らかだ。以下では、社交性論のなかでは明確に述べられない、社交的な人間関係と知人・友人関係との連関を検討する。

知人関係と社交的な集まりが示唆する人間関係は、たしかに「気配り」を重視している点で重なる。しかし、知人関係が人格的な関係には基づいていないのにたいして、社交性においては、「心遣い」やコケットリーや歓談をめぐる議論が明確に示していたように、参加者の人格が部分的にであれ人びとの関係性のなかに入り込むのだ。

だとすると社交性論は、気配りとそれに基づく知人関係を出発点としながらも、人格のより深いところとつながった関係の在り方を提示しているはずだ。ではジンメルは、社交性と親密性が重なる人間関係として何を考えたのだろうか。ここまでの検討からすると、これが友人関係なのではなかろうか。もちろんジンメル自身が社交性論のなかで友人関係を主題として語ることはない。しかし、社交性論は明確に友人関係を意識していると思われるのだ。以下この点を三つの観点から示す。第一にジンメルの行論である。第二に社交性における沈黙の議論、第三に部分的かつ決して明瞭には表現されない人格性である。

第一に、社交性におけるコケットリーから歓談への議論の区別と愛に基づく関係と友人関係との区別が酷似している。社交性論において、歓談とコケットリーに言及される際に、前者が「社会の遊戯形式」とされるのに対して、後者は「愛の遊戯形式」とされる。性差の入り込むコケットリーが男女の非等価性をはらむのにたいして歓談にはそうした性格はない。これは「気配りの心理学」における友人関係と性愛に基づく夫婦関係とを区別するときのそ

れと一致している⁵。

第二に、友人関係で言葉を発さないことの意義が示されたように、社交性をめぐる議論でも明確に「沈黙 [Schweigen]」の力が論じられる。『社会学』のなかで、高度な社会文化 [hohe gesellschaftliche Kultur] と沈黙は切り離せないとされる。先に社交性論のコケットリーに言及した際、ジンメルは「高度な社交文化」を語っていた。沈黙についても同種のことが述べられる。「すべてのイメージや感情、衝動が妨げられることなく言語として湧き出るばあい、何ほどか有機的な共存に代わって混沌たる無秩序が成立する」。つまり「規制された交流の成立」には沈黙能力が不可欠なのだ。そしてこれは「高度な社会文化のもっとも重要な所有物」である。注目すべきはジンメルがここで「歓談」を使っている点であろう。「たとえば、ある集まり [Gesellschaft] において客たちが互いに歓談 [Unterhaltung] しているかぎり、主人は引っこんでいなければならない」(GSG 11: 426＝上391 強調引用者)。友人関係において「無言で良い関係を保つこと」が重視されていたのと重なるのだ。

第三に——以下で示すようにこの点によってそうした関係を扱う難しさも際立つことになるのだが——社交性論でも友人関係の議論でも、人格性から始まる関係が展開された。社交性論では社交性衝動や心遣いの内発性、友人関係でも部分的な友情として人格的な人間関係が語られていた。そして社交的関係にせよ友人関係にせよ、人格性は明瞭なかたちで把握されない。社交的歓談の会話における「贈り物」は、その贈り手が「背後に隠れて見えない」ものだったし、友人関係では、「水面下の近さ」であった。

ただし友人関係と社交的歓談に連なる人間関係が一致するわけではない。友人関係においては、社交性論における芸術や美学、「遊び演じられた民主主義」についての議論はないのだ。それでも部分的で影・象徴的でありながらも人格性が人間関係のなかに入り込んでくるという点で、知人関係よりも友人関係にずっと近いもので、社交性論は人格性に基づく親密な関係を扱ったものだといえる。そして社交性論がどれほど親密性に基づいていようとそれが閉じられたものではないことには注意すべきだろう。社交性論において節度のある歓談は「一切の個性的な親密さの彼岸、純粋に人物的なものの彼岸」にあるのだ (GSG 12: 189)。

5

ジンメルは「友情」を性の二元性とは別次元で考えている。男性同士の結束といった議論は「気配りの心理学」ではなされず、また旧知の女性との関係を示すときにこの言葉が使用される。ベルリンのサロン文化のワンシーンであったザビーネ・レプシウスヘジンメルが死の直前に送った最後の手紙 (1918年9月11日付) では「友情」という言葉が用いられている。「私はあなたに長い長い別れの挨拶を述べますが、そのなかにはやはりまたこの33年 (私たちはそれほど長い付き合いがあります) の時間の命運が密に入り込んでいます。私はあなたの好意とすべての時間に感謝しており、それは私たちの友情から美しいもの、深いものへと与えられた一切のものへの感謝です」(GSG 23: 1015)。

4 余地としての境界域

4.1 人格性の深みと境界

さて最後に、このように社交性論と友人関係の議論とを連関させることによって生じてくる問題と応答を指摘し本稿を終えたい。問題とは知人関係で

は要請されない、相手の人格性の深みやその境界を把握せねばならないというもので、それへの応答は両者の間にある「空の空間」である。

社交的な関係を介した友人関係において、そこで把握されるものは、容易にみえる表層と結びついていながら決して明瞭には現れない「深み」である。しかしその把握のあり方についてははっきりと書かれていない。部分的な友情が成立するのは、相手の全体性へとたどり着くことによるのではなく「人格のもっとも深い水源に浸ることによる」(GSG 8: 112 強調引用者)。そして表層的だと非難されることもある社交性と個々人の生とが結びつくのは「たんなる部分の現象がもつ独特の法則や、表層から選ばれた要素の組み合わせが豊かな実在性 [Realität] の深みと全体性へと関係付けられて」いるからだとする。そしてそのつながりを把握しているのは「往々にして定式化しえない」、「信仰や感情」なのだ (GSG 12: 192 強調引用者)。同様の困難は、親密な関係へと向かう際に不可欠な私たちの認識作用、すなわち他者の領域の問題にも及ぶ。「社交性の社会学」においても「気配りの心理学」においても「良き仲を保つこと [Sichverstehen]」への言及がある (GSG 12: 189; GSG 8: 113)。しかしジンメルはそのあり方をそれ以上語っていない。

これについての議論は『社会学』第9章の補説「心的境界付け」である。この箇所においてはジンメル自身が、『社会学』の「秘密」の章——それは「気配りの心理学」が挿入されている章でもある——と関係があると明言している。貨幣を介した関係や職業上の関係といった事実的関係よりも近い人間関係が成立するには、「例外なく」相手について、その本人が示すよりも多くのことを私たちは知り、そうした断片から相手の統一的な人間像を生み出す必要がある。これが「異なる魂の構成 [Konstruktion der fremden Seele]」である。「完全な人間があらわれるまで、推論、解釈、挿入 [Schlüsse, Deutungen und Interpolationen] によって所与の断片を全体へと補充 [ergänzen] しなければならない」。しかし、そこで構成される人もまた「気配りをされる権利」をもつとされる。先の気配りのなさの箇所でもみたように、こうした断片から全体への補充は、「異なる魂」——ここでは他者といいかえることができるもの——にとってはその人の理念的領域への干渉なのだ。ジンメルは、「異なる魂の構成とこの心理的な気配りのなさ [Indiskretion] とのあいだの境界はどこにあるのであろうか」と問う (GSG 11: 698 = 下 226)。

しかしジンメルはこの境界の引き方を一義的には確定できないとする。「この線には無限にさまざまな引き方」があるとされ、ひとまずその線の引き方を社会的なものから説明することが提案される。線引きは当の本人が決めなければならないのだが、その基準は時代や関係の性質 (両親と子ども、商人同士) によって異なる (同: 699 = 下 227)。

4.2 空の空間としての境界域

この境界線の引き方についてはこれ以上展開されていない。しかしジンメル本人が意識していたか否かはわからずとも、境界線の社会的意味、そして社交的交流を介した友人関係の把握に決定的に重要と思われる議論が残されている。それは『社会学』第9章の空間論に登場する「空の空間〔der leere Raum〕」である。空の空間の例として提示されるのは、二種類の機能をもった空の空間である。第一には集団や個人同士を分離させる空の空間である。第二にはそれらに結合をもたらす空の空間である。

分離の空間としてそれは緩衝地帯の荒地であり、誰のものでもなく闘争が繰り広げられる場所である。境界の荒地は集団の防御要求から生じる。かつて諸民族は他の民族との間に荒地をおくことで集団間の葛藤を抑制した。それは〈あなたが何もしないならば私はあなたに何もしない〉という格率として表現されている。この格率を映し出すのが荒地であった。これにたいして誰のものでもない境界の空間は、法的にどちらかの集団に属する決定がなされるか、早く領有した側のものになるか衝突のなかで勝ち取られるかである。こうして捉えられる空の空間が、帰属先のない空の空間であり続けるには、その空間を意図的に所有しない、そこに意図的に立ち入らない倫理が求められる。この倫理は外的に強制されるものではない。個人の道徳として「他者にたいして示される配慮〔Reserven〕と利己的な行動の断念」を必要とする。ジンメルはこの第二の、個々人の道徳性に依拠した外的強制によらない空間を人と人との間にある空の空間にも適用する。「良心的な人びとのあいだにはいわば観念的な真空〔ein ideelles Vakuum〕が存在する」のにたいして不道徳な人はこの領域へと侵入し利益をえる。そしてこの空隙の扱いが「社会的な圏全体の内容的な本質とともに社会的な本質をも規定する」（同：786-787＝下305）。

結合の空間は純粋に中立の領域として示される。分離の空間としての商人たちが目指す空の空間はたしかに各個人の利益をめぐる戦いの場ではあるが、それは別の見方をすれば、すなわち結合という側面からみれば、客観的な価値の交換である経済活動によって「立場性を超えている中立の」空間である。これは「出合いの生じる境界線」であり、この境界線では誰も自身の属する立場を捨てる必要がないとされる（同：788＝下306 f.）。

立場性を超えながら立場を捨てる必要がないとはどういうことか。それはこの境界線がたんにそれを超えたら敵対する立場の領域に入るというようなものではなくて、それが境界地帯の性質をもつからである。ジンメルはこの幅を現在〔Gegenwart〕の時間的幅との類比で説明する。私たちが「現在」というときには、ある点としての瞬間が現在なのではなく、ある点の前後のある程度の時間を含めて現在と表現する。これと同じように境界線とは実際

6

これとは反対にそれを一步でも超えることが許されない人工的な国境というのは分離の空間であって、元来連続していた場所にあえて境界線を引くことで国同士の対立関係を極めて強く表現するものとなる(cf. GSG 11: 695 =下 223)。

のところは何らかの幅をもっていて、それを超えたからといってすぐに別の、敵対する領域に入るというものではない⁶。このような中立地帯としての境界域では、党派性をもった集団同士が対立していても、立場が問われることがないため自身の立場を捨てることなくその場にいたり別の人と出会うことができる(同: 789 =下 307)。

ここから空の空間の要点を次の三点にまとめよう。第一にこの空間は外的な強制力をもたない空間としてあるために、そこでの振舞いは個々人に委ねられている。第二にそれは、中立の空間であり個々人の断片的な立場性や党派性を超えた空間である。第三にこの境界域には一定の幅がある。こうした空の空間は、社交的交流の規定に類似している。社交的交流では外的強制力ではなくその場にいる個々人の力が重要であり、党派性や立場性を脱ぎ捨てなければならなかった。

注目すべきは第三の特徴としての境界域の幅である。友人関係や夫婦関係といった親密性にかかわる関係を形成する際にジンメルがメルクマールとしていたのは、「気配りのなさ」であった。つまり気配りによって相手の領域に立ち入らないのみならず、その領域を侵犯する「気配りのなさ」、「異なる魂の構成」がなければ、親密な関係はあり得ないというものだった。この相反する二つの要求が社交的交流から友人関係へと議論を展開するとき問題になってしまう。しかし境界に幅があり、空の空間が想定できるならば、社交的交流と友人関係はつながり得る。部分的に表出された個のなかであってさえ、その人のその部分に表現されている全体性を社交的交流の過程のなかで相互的に発見することができる。そこで発見している個はまさに、その社交的歓談の参加者の間にある境界域としての空の空間において話されていることに基づいた「異なる魂の構成」である⁷。ただしそこでの「異なる魂の構成」は流動的である。そのため常に留保をつけながら構成される「異なる魂」であろう。この境界域は、日本語だとつながりが薄れてしまうのだが「余地 [Spielraum]」といえる。社交性が遊戯・演技の形式として規定され、演じること [Spiel] に大きな意味があったのは先にみた通りである。

7

廳は理解と社会、理解と社交性との関係づけについて明確に言及しているが、その「親和性」に議論をとどめている(廳 2005: 65)。

5 結び—社交性から生まれる友人関係

本稿で立てた問題に答えよう。まずゴフマンが「迷惑」だとした、ジンメルの社交性をもつ独自の性質は、個々人の部分的人格に根ざした生きた象徴的な、影の形象として、その他の社会関係から明確に区別される。そして社交性は、ジンメルが様々なかたちで述べているように、たんなる相互作用の流れに還元できるものではなく、形象として成立するものである。そして、

そこであり得る人間関係は、近代社会において不可欠な知人関係と気配りを前提としながら、知人関係に全面化されることはない。社交的な人間関係があり得るとすれば、それは気配りを成立条件としながら、理念としては成立している部分的で微かに垣間見える人格性から生じる友人関係である。しかし明確に親密性が問題となることによって、人間関係の成立を理論化する困難に直面する。友人関係の議論でも社交性論でも「良き仲を保つこと」が問題となるのだ。それは気配りと対になる気配りのなさや「異なる魂の構成」といった、ジンメル自身もその回答を特定の時代との連関で考えざるを得なかった問題を社交性論のなかで前景にもたらしことになる。それでも空の空間である「境界域」という議論からすると、社交的交流から生まれる諸個人にとっての境界域のなかで、「余地」が生まれそこで諸個人は、友人関係という相互の人格の全体性にかかわる人間関係を形成しうるのである。

文献

- Albrecht, Clemens, 2018, „Geselligkeit“, Hg. von Hans-Peter Müller und Tilman Reitz *Simmel-Handbuch: Begriffe, Hauptwerke, Aktualität*, Berlin: Suhrkamp, 246-250.
- 芦川晋, 2020, 「公共空間の変容と個人——ゴッフマン、セネットにみる親密性／公共空間の問題構成」『中京大学現代社会学部紀要』14(2): 1-14.
- 廳茂, 1995, 『ジンメルにおける人間の科学』木鐸社.
- , 2005, 「G・ジンメルにおける「理解」問題」『ディルタイ研究』16: 30-71.
- , 2008, 「ジンメルの生涯と業績」早川洋行・菅野仁編『ジンメル社会学を学ぶ人のために』世界思想社, 2-22.
- , 2015, 「G・ジンメルの「規範化様式」論(中)」『近代』112: 1-53.
- , 2017, 「ジンメルのコミュニケーション論」日本社会学会編『社会学理論応用事典』丸善出版, 302-303.
- Goffman, Erving, 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday: Anchor. (中河伸俊・小島奈名子訳, 2023, 『日常生活における自己呈示』ちくま学芸文庫.)
- , 1961, *Encounters*, Indiana: Bobbs-Merrill. (佐藤毅・折橋徹彦訳, 1985, 『出会い——相互行為の社会学』誠信書房, 1-81.)
- , 1963, *Behavior in Public Places: Note on the Social Organization of Gatherings*, New York: Free Press. (丸木敬祐・本名信行訳, 1980, 『集まりの構造——新しい日常行動論を求めて』誠信書房.)
- Han, Byung-Chul, 2012, *Transparenzgesellschaft*, Berlin: Matthes und Seitz. (守博紀訳, 2022, 『透明社会』花伝社.)
- 石田光規, 2022, 『「人それぞれ」がさみしい——「やさしく・冷たい」人間関係を考える』ちくまプリマー新書.
- 菅野仁, 1990, 「ジンメル近代文化論の射程——「生」と「分業」の統一的把握に着目して」『社会学評論』41(1): 26-40.
- , 2003, 『ジンメル・つながりの哲学』NHK ブックス.
- , 2008, 『友だち幻想——人と人の「つながり」を考える』ちくまプリマー新書.
- , 2009, 「恋愛というコミュニケーション」長谷正人・奥村隆編『コミュニケーションの社会学』有斐閣, 167-186.

- 北川東子, 1997, 『ジンメル——生の形式』 講談社.
- 久保田裕之, 2024, 「友人関係と共同的親密性——「友人関係は結婚を代替し得るか」という奇妙な問いをめぐる」『現代思想』 52(9): 45-54.
- 牧野智和, 2023, 「2010 年代自己啓発書ベストセラーにみる「心の習慣」」北田暁大・東園子編『岩波講座社会学 文化・メディア』 岩波書店, 135-156.
- 水谷雅彦, 2022, 『共に在ること——会話と社交の倫理学』 岩波書店.
- 森真一, 2000, 『自己コントロールの檻——感情マネジメント社会の現実』 講談社.
- 小川伸彦, 1996, 「デュルケームの「中間集団」とジンメルの「大都市」——〈自由〉のための二つの場所」『社会学史研究』 18: 51-61.
- 岡澤憲一郎, 2015, 『ゲオルク・ジンメルの思索——社会学と哲学』 文化書房博文社.
- Schleiermacher, F. D. Ernst, 1990, *Ethik(1812/13): Mit späteren Fassungen der Einleitung, Güterlehre und Pflichtenlehre*, Hg. von Hans-Joachim Birkner, Hamburg: Felix Meiner.
- Simmel, Georg, [1900] 1989, *Philosophie des Geldes*, GSG 6. (居安正訳, 2016, 『貨幣の哲学』 白水社.)
- , [1906] 1993, „Psychologie der Diskretion“, GSG 8, 108-115.
- , [1908] 1992, *Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, GSG 11. (居安正訳, 1994, 『社会学——社会化の諸形式についての研究』 白水社.)
- , [1911]2001, „Soziologie der Geselligkeit“, GSG 12, 177-193.
- , [1911/12]2012, „Allgemeine Soziologie: Winter-Semester 1911/12 von Georg Heym“, GSG 21, 754-756.
- , [1917]1999, *Grundfragen der Soziologie: Individuum und Gesellschaft*, GSG 16, 59-150. (阿閉吉男訳, 1967, 社会思想社; 清水幾太郎訳, 1979 岩波文庫; 居安正訳, 2004, 『社会学の根本問題——個人と社会』 世界思想社.)
- , 2008, *Briefe 1912-1918. Jugendbriefe*, GSG 23.
- 杉本学, 2024, 『ジンメルにおける社会生成の理論』 学文社.
- 鈴木宗徳, 2009, 「「次はもう選ばれないかもしれない」という恐怖——人間関係の再帰化と公私の変容」古茂田宏・中西新太郎・鈴木宗徳編『21 世紀への透視図——今日の変容の根源から』 青木書店, 196-216.
- 高木裕貴, 2023, 『カントの道徳的人間学——性格と社交の倫理学』 京都大学学術出版会.
- 高木裕貴・苅部直, 2023, 「よき飲み会の思想——人づきあいの変遷を読み解く」『中央公論』 8: 84-91.
- 田村豪, 2020, 「「社交性の社会学」序説——G・ジンメルとE・ゴフマンにおける社交性論の境界」『社会学雑誌』 37: 175-192.
- , 2022, 「ジンメル社交論の再構成——仮構・象徴・律動」『社会学史研究』 44: 73-91.
- 梅村麦生, 2023, 「『社会学的言い訳』批判とはいかなる批判か——社会学的帰属の観点から」『社会学雑誌』 40: 9-35.

(神戸大学大学院人文学研究科研究科研究員・社会学説史)